

読書のすゝめ

その11 R2 6/16

生きること

11日に関東地方も梅雨入りしました。じめじめと鬱陶しい時期ではありませんが、紫陽花は雨に濡れて美しく、心を慰めてくれます。今回は『死』をテーマとした本を紹介します。重いテーマですが、この梅雨空を眺めながら思索にふける時があってもよいかな。『死』を考えることで『生きる』とは何かを考えていきたいと思えます。



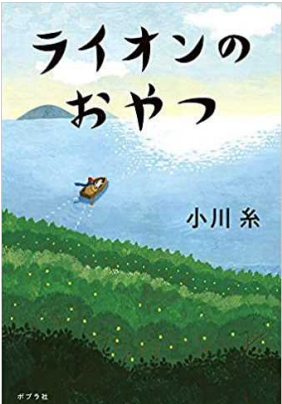
『安楽死を遂げた日本人』宮下洋一（小学館）



安楽死は自殺補助ほうじよであり、日本では認められていません。海外でも一部の国で認められているに過ぎず、さらに外国人が安楽死できる国は唯一スイスのみ。多系統萎縮症という全身の機能が衰えていく難病に罹患した小島ミナさん（享年51歳）は安楽死を決意し、姉二人とスイスに渡った。昨年NHKスペシャルで放映され、たまたま視聴して大きな衝撃をうけました。安楽死と尊厳死の違いは何か。終末期医療としての緩和ケアのありかたはどうなのか。

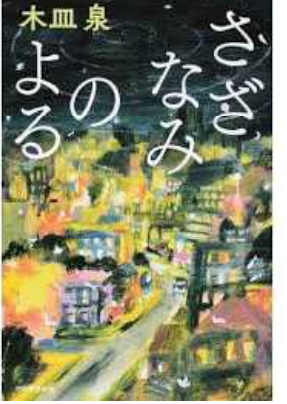
「私」は「あなた」（他の誰か）ではない。だから、「私」と同じ人生が無いように、同じ「死」はない。だが、人は一人で生きていくのではない。「私」一人の「死」で完結するのではない。読後、深く深く考えさせられる。

『ライオンのおやつ』小川糸（ポプラ社）



人生の最後に食べたいおやつは何ですか――若くして余命を告げられた主人公の雫は、瀬戸内の島のホスピスで残りの日々を過ごすことを決め、穏やかな景色のなか、本当にしたかったことを考える。ホスピスでは、毎週日曜日、入居者がリクエストできる「おやつの日」があるのだが、雫はなかなか選べずにいた。――食べて、生きて、この世から旅立つ。すべての人にいつか訪れることをあなたかく描き出している。「物語」だから、ホツとする。今が愛おしく毎日を大切にしたいくなる一冊。

『さざなみのよる』木皿泉（河出書房新社）



小国ナスミ、享年43。死を通して、主人公自身と、周囲の人たちの関わりを描いた作品。――お金にかえられないものを失ったのなら、お金にかえられないもので返すしかない。生きていくと、目の前の瞬間を乗り切るため、大切にしていた信条や言葉を手放さざるを得ないときがある。そして、心がどうしようもなく暴れて溶け出しそうになったとき、本は踏ん張る力を生む一行をくれる。

『子どもホスピス〜限りある小さな命が輝く場所』田川尚登（新泉社）



日本ではまだ少ない「子どもホスピス」の設立のために活動する著者が、わが子を亡くした自分や患者会遺族の体験をふまえ、子どもホスピスとは何か、その必要性とともに語った一冊。『子ども自身が、「この世界に生まれてきてよかった」と思えること。両親や家族が、「この子が生まれてきてくれてよかった」「出会えてよかった」と思えること。それこそが、限りある子どもの命と向き合うということではないでしょうか。』（本文より）



木製回転式書架
が入りました！